

Title	中沢弁次郎監修 輪中聚落地誌
Sub Title	
Author	小池, 基之
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.10 (1936. 10) ,p.1585(179)- 1591(185)
JaLC DOI	10.14991/001.19361001-0179
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361001-0179">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361001-0179</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

して著者自ら反省すべきであらう。第二に彼の研究方法であるが、彼は研究のための眞實な素材を獲得せんとして相當細心の注意を拂つてゐることは事實である。しかし彼の専ら倚據せる主要方法は労働者の内觀的報告の聴取である。吾々は労働者心理学の研究に於いて、彼の如く専らこの方法に頼ることの危険を一般的に認めなければならぬと同時に、また彼の場合には特に、労働者の内觀報告が豫め著者との間に理解せられてゐた前述の諸種の感情状態の表現を以つて充分眞實なものを傳へ得たか否か、或は寧ろ豫めかく設けられた理解のために彼等の内觀報告が多少眞實の事實を歪めて傳へてはゐないか、これ等の疑問を一掃すべき充分の根據は少くとも提供せられてはゐない。

右の如き疑問とも關聯して、私の此處に力説して置き度いことは、労働者心理学が一つの獨立科學として持つ所の分野を劃然と限定し、またそれ自體が獨立科學としての存在を示し得る科學的體系を持つことと益々必要にして、重要であると云ふことである。既に労働者が心理學的研究と見做さるべき個別的研究は、假令へ遅々としてゐるが、除々に蓄積せられつゝある。そしてこの種の研究をしてより有効のものたらしめるためには、個別的な研究に一定の科學的地位を明言し、これを適當に評價し得る包括的な科學的地盤が存在することが望ましい。個々の問題に關する研究の重要であることは勿論であるが、私は右の意味に於いて労働者心理学の確立の一日も速からんとを希望して止まないものである。

附言、ハイシーの研究はアメリカに於いても亦ドイツに於いても、共に鐵道修繕工場の男工に就いて行はれたものであつてドイツに於いてはベルリン、ミュンヘン及びルールルのミュールハイムの三ヶ所の工場が選ばれてゐる。

—昭和十一年九月二十日稿—

## 中澤辨次郎監修「輪中聚落地誌」

### 小池基之

「輪中」とは木曾川河口より木曾・長良、揖斐の三大河川流域海拔十五米線内の扇形地帯に於て、この低濕地に居住する人々が、水の過多に對する防禦・保護方策として、且つ生存權掩護のため、此の三大河川の合流地域に網流する幾多の大小諸支流、諸派川によつて圍繞せられた低濕地の一區域毎に輪形堤を設け、その築堤を以て圍繞する所の特定の一區域を指すものである。(別頁五—六頁、本文三頁、五—八頁)本書に従へば、その當初に於ては移住者が戸毎に個人的自然防禦として其の住居及び耕作地の周圍に蟻垤程の周形堤を設けたものが、洪水に對する協力的必要から、各隣接者と協力して、より大なる住居、耕地を圍繞する輪形堤を築いて、特定水防地帯及び定期増水地帯に自發的に限定的な一共同單位を構成するに至つたこの「輪中」は、「水防地帯、水害地帯に居住する人間聚落地域的並に空間的に獨立した社會關係の一塊をなしてゐるが故に、此れを「自然的地域」、「自然的社會」(The Society of the Rural Life)とも稱することを得」、又「輪中」内の生活は「有機的な相互に關係し合つてゐる全體を構成してゐるの」で、「他面より之れを見れば「輪中」は連帶的、協同共援關係の所産にして、同一利害關係の下に立つ村落の複合體たる村落團體(Dorfgenende)である」と規定されてゐる。(三三七頁)従つて封建社會内に於ては一つの共同自治體を

構成し、一つの人格権とも云ふべき権利を掌握し、政治上、行政上の、或る場合には納税上の二單位を形成してゐたのであつて、今日に於ては變形して特殊なる「水利組合」となつてゐる。かくの如き水防、排水を目的として構成された輪中制度は、そこから生ずる特異なる生活形態に基いて、地域的に獨立した特定の社會的結合關係を生じ、その生活環境に即した集團的生活が營まれる。この地縁的結合は、水防・排水を回つての、自己の關與する輪中内に於ては防禦的相互扶助的意識として、對岸輪中に對しては排他的意識としてあらはれる強固な「輪中意識」を培養せしめた。(四頁、三六三頁、五二九頁)この共同生存權の獲得・確保である強固な水防意識、「輪中意識」は現在に於ても輪中民の裡に牢固として抜くべからざる力をもつてゐるので、彼の昭和四年の單なる小川犀川の切落し計畫さへもが、昭和時代の不祥事として、下流輪中内民衆の社會的壓力が一縣の全警察能力を壓して、遂に軍隊の出勤を見るに至つた一大騷擾事件にまで發展するに至つたのである。(本書收録「犀川騷擾事件と輪中意識」)

かゝる輪中地域はその自然的・歴史的諸條件から、全く獨自の地域、歴史、社會、景觀を持つものと云へやう。本書はかゝる特殊地域「輪中」に於ける「人文地理的現象を歴史的、社會的、經濟的諸視野から検討した」(序文二頁)ものである。

本書の著者によれば輪中聚落はその地方の特殊的な自然的・地理的諸條件の上に形成されたものであるから先づその制約者として特殊な自然的・地理的條件が最も基本的な關係を有する。従つて輪中聚落の具體的分析は自然的諸規定の分析から初められる。即ち「輪中聚落の地理學的研究」(秋山桓土及び栗山篤雨氏の擔當)が本書の第一編を構成し、「輪中聚落形成の歴史的研究」(山田清氏擔當)輪中形成の社會的經濟的要因が第二編を構成する所以であると思はれる。

○輪中形成の自然的地理的諸要因は次の如く要約される。

- (一) 五百餘方に渉る濃尾平野は、史前海であつたものが、河川の流出せる土砂沖積作用の時代的展開によつて現出せるものである。
- (二) 流土砂量の河川別の差隔が、前記の如くして現出せる洲面に東北より西南への勾配を與へ、出水氾濫の激變に際して河道が漸次低き地平標高を有する西濃山麓に向つて偏在するに至つた。
- (三) 概地帯の氣象狀況が非常に多雨性であつて、相併流せる大小河川に、一時に雨水が流入し、低地域の沿岸一帯に怖るべき洪水を見舞ふ事頻繁である。
- (四) 前述の如き洪水に對する水防設備として輪中が形成されたものではあるが、流域の側面的或ひは自然的傾向への抑壓は、流土砂の沈澱堆積を増長し、河川の水位を高めて輪中形態の發達を促進せしめるに至つた。
- (五) 洪水被害の激増は、科學文明の進歩と相俟つて水防對策に表はれ、出水程度の豫測方法に大なる進歩を現はし、増々輪中形成の實を擧げつゝある。(六一―三頁)

即ちかゝる自然的條件が存續する限り輪中形成の必然性が有するので、著者によれば「輪中形成の要因は、農業經營上の特殊なる制度でもなく、民族生活の特異なる生活様式でもなくて、實に特殊地域の人類生活體が地理的環境克服の「手段」として採れる形態」なのである。(四四頁傍點筆者)この見地から輪中聚落の外廓的形態として堤防の發達、形態、保護政策、及び輪中聚落地域とその變遷、(第一編第三章)、人文的觀察として、輪中及び輪中聚落の形態、居住形式(特に水屋、川舟あげ舟)、輪中神社との關係「ごくら」、地名について述べられ、(第四章)更に、從來はその地理的環境から「堀田」、「くね田」等の形態をとつてゐた農耕が、明治二十五年―三十五年の三天川下流

改修工事の結果、輪中形態の變化及び技術の進歩に伴つて如何に變化したか、又利根川下流、或ひは筑後川下流有明海北岸の低地等の干拓地と「輪中」とは如何なる特異性をもつてゐるか、等がその人文地理學的な立場から述べられてゐる。(第五章)

翻つて輪中聚落の形成を史的に—經濟史的に見た場合(第二編)、その形成過程は、端初的には低濕地へ人民の漸く蕃殖するにつれて、戸毎に個人的自然的防禦として諸支流の網流せる網目毎に住居及び耕地を保護する周形堤防を設けたこと、班田の必要による政府の直接的開墾、社寺貴族たる大資力者の莊園としての墾田の擁護としての築堤、又特に分權的封建時代に於ける三大川流域地方に於ける林制の弛廢、森林の濫伐に基く洪水の誘發による自助的施設としての輪中の形成、及び封建諸侯が軍事的目的を以て當輪中堤を利用又は修築したこと、(第二章三一六一—三二九頁及び四二四頁以下)等によつて次第に形成されて來たものであるが、輪中制度が特殊な社會制度として制度化されたのは集權的封建社會下に於てである。(第三章)(「徳川氏制覇の下に於ては、封建的諸特質が最も顯著の形態を以て制度化されたのであつて、此等の封建的諸制度と「輪中」形成過程との間に於て、最も美濃の特異的社會制度たる「輪中」制度の社會經濟史的意義が潜んでゐるのである。」三三三頁)即ち美濃に於ける分割的小藩の配置關係が河川全般に亘る積極的防禦を防すことを得せしめなかつたこと、従つて輪中相互の矛盾對立が揚棄せられず、自村中心の分立的個立的な獨特の輪中制度を現出せしめたことが之である。併乍、特に「輪中」形成に對する最も重大なる契機となつたものとして、新田開發と共に、「一面軍事的目的を賦與されてゐた」「御圍堤」の築堤が擧げられてゐる。更に「寶曆治水」を契機として「輪中」の地域的分立状態より同一利害關係を中心として、より一層小輪中の連帶合「が行はれ、その圍繞地域内の質的充實がもたらされた」とかれてゐる。即ちこゝでは、「輪中」の形成、

發達に對しては幕府の勢力分散政策と、上からの治水政策が重要な契機として擧げられてゐる。

以上によつて見るに、「輪中」制度は畢竟、特定の歴史的段階の各々の社會經濟的諸條件と、自然的地理的諸條件との交互交錯關係及び此等の關係下に置かれた當輪中聚落地帯内住民の、特異的な活動・行爲の統一的所産として形成され、それが發展して内部的に充實化し、統制ある組織を有するに至つて初めて制度化されるに至つたものである。(四六三頁)歴史的現象は自然的條件によつて制約され、又當地帯の自然的環境も夫々の歴史的段階に於て初めて具體的意義を有する。即ち著者の立場は輪中制度を自然的・地理的條件と社會經濟的諸條件との相互關係に於て把へんとするものであるが、(例へば三一六頁)、その何れが基本的なものであるか。「輪中」形成の歴史的發展に於ては、制約者としての自然的條件が最も基本的な單位をなすものであるが、斯る自然の制約性も、封建社會と云ふ一つの社會的範疇に於て、初めて、輪中の歴史的發展に對して規定を與へたのである。(三三三頁)「従つて「輪中」と「水」とは不可分の關係に在り、西濃の特異的な地理的、自然的條件、自然的支盤を離れては考へられぬものである。乍併、専ら輪中形成の基本的制約者としての這間の自然的、地理的條件も、歴史的過程に於けるそれぞれの社會的範疇を通じて初めて輪中成形に對して、一つの規定を與へるものである事を看過してはならぬ。」(三一四頁)従つてその方法的典據は著者自身が示してゐる如く、西洋の森林文化(Waldkultur)に對して東洋の治水文化(Bewässerungskultur)を對置せしめるマックス・ウェーバーであり、給水諸方策の總體的複合たる「灌漑」と、水の過多に對する治水諸方策の一切の諸形態たる「排水」とが東洋の農業社會の基底をなしてゐるとなすウィットフォードである。(序編、別頁一一—二頁)即ち東洋の前資本主義的社會の基底をなした農業經濟は灌漑・水利の上に發達したものであり、その歴史的諸段階にあつては、灌漑・水利の形態に於て自然制約的生産力が、その發展の制約者と

して重要な意義を有し、特に東洋社會を特徴付けたのである。「従つて東洋の灌漑社會の解明の中に、東洋の社會經濟史的発展の理解の鍵が、かくされてゐるとも言へるのである。」(同三頁)そこで「日本の農業の本質的一契機たる灌漑」の具體的な研究は又我國の社會經濟發展の究明に對して決定的な重要性をもつものとしてとりあげられる。「輪中」聚落地誌の意義も實にこゝに求められる。(同五頁)即ちこの限りに於て東洋社會に對するマジヤールの見解がそのままとり入れられてゐるものと云へやう。勿論自然的諸條件と社會的歴史的諸條件は單なる相互作用を營むものではなく、自然的諸條件に關する限り、それは勞働過程を通じて歴史に對する制約者としてあらはれて來るのである。自然的諸條件は生産諸力の水準の高さに依存して種々の作用をあらはす。特にその水準の低い段階に於ては、自然的諸條件の示す役割の大であると云ふ關係に於てのみ、「輪中」聚落形成に對する自然的地理的・諸條件の分析は大いに評價さるべきである。

兎に角輪中地帯を特徴付けるものは水利的特異性であり、それから用水井組制度、株井戸制度、定杭制度、或ひは特異なる地割制度等の特徴ある諸制度が行はれてゐる。(第二編第四章)前述の如き「輪中」を一つの共同自治體たらしめたものはこの「水の公有性」であるが、かかる村落團體を繞つて、單なる水防に止まらず、村の生活組織について、農耕等に於ても特殊な、一層の協同性が存するのではなからうかと想像される。しかしその爲めには村の生活自體が外部からではなく、村生活の内部に立入つて、内面的に取り上げられなければならない。

乍併、本書は豊富なる資料を縦横に驅使することによつて、從來たゞ断片的に採り上げられたに過ぎない特殊地域、輪中」地帯を、社會經濟、農政、治水、土木、林政等の各視野から分析したもので、この「學界未到の分野」ははじめて全面的に斧鉞を加へられたと云ふべきである。元來地方的な特殊制度・習慣の研究は、我國農業經濟の理解

にとつて極めて重要であり、我國農村の特質及び本質的な諸關係の究明はこれ等の諸研究を前提としてはじめて爲し得るものである。しかもかかる研究は極めて困難であり、唯特殊な便宜を有するもののみが可能であるので、たとへ断片的な研究報告と雖も決してその價值を過小評價することは出来ない。況んや本書の如き全面的な研究に於ては、その學問的貢獻は極めて大であると云はねばならない。附録として監修者中澤辨次郎氏著「農村經濟講話」中の「木曾岬輪中の干拓小作」、同氏稿の「犀川騒擾事件と輪中意識」(東京朝日新聞昭和四年三月十五、六、七、八日所載)及び山田清氏「輪中制度の研究」(社會經濟史學第三卷第三號昭和八年六月號所載)が収録されてゐる。(日本農村問題研究所發行、菊判五七七頁、特價六圓)